

タイトル名「対人援助実践をリポートするこの一冊」

第30回：第4章-その2-

僕とゴッホ

著：二階堂哲
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

漫画読書体験と対人援助とのつながり

漫画が身近にない家庭で育ったこともあり、漫画にはあまり親しみがなかった。

中学生の頃に買ってもらった映画版『風の谷のナウシカ』が、おそらく唯一、親から買
い与えられた漫画だったと思う。とても嬉しかったことを、今でもよく覚えている。

このように漫画とは縁遠い生活を送ってきたため、今章の企画の話をいただいたとき、
「自分が参加していいのだろうか」と、少し戸惑った。しかし、せっかくの機会なので、
これまでの数少ない漫画の読書体験を思い出しながら、対人援助とのつながりについて考
えてみたい。

『バカとゴッホ』との出会い

漫画の面白さに気づいたのは、大学時代に読んだ加藤伸吉の『バカとゴッホ』との出会
いがきっかけだった。あまり知られていない作品かもしれないが、高校卒業を目前にバン
ドを解散した堺と正二、そして学校をやめて独学で服飾を学ぶ少女・ゴッホ。彼ら三人を
中心に展開する青春の物語だ。音楽やモノをつくること、それらを通して表現すること、
そのよろこびと痛みが、緻密で力強い絵で描かれていて、読んでいると心がざわつくよう
な高揚感があつた。

なかでも心に残っているのは、登場人物たちがみな、「表現したい」という衝動を抱え
ていたことだ。堺と正二は音楽で、ゴッホは服飾で、自分の思いを誰かに伝えようとして
いた。社会とうまく折り合えず、言葉も拙く、思いがこぼれてしまうような彼らが、それ
でも音やモノを通して誰かに向かおうとしている。その姿に胸を打たれた。

この「表現したい」という気持ちは、特別支援学校に通う子どもたちの中にも、当然な
がらある。うまく言葉が話せなかったり、集団の中にいるのが難しかったりする子もいる

が、それは、「何も伝えたいことがない」というわけではない。むしろ、その思いはとても真っ直ぐで、強いと思う。

特別支援学校教諭として

教員として、私は日々、「この子は、どんなふうに分を表現できるのだろうか?」、
「この子にとっての、より良い表現方法はないだろうか?」と考えている。一人ひとりに
合った表現のかたちを探しながら、支援方法を試行錯誤している。

『バカとゴッホ』の登場人物たちがそうであったように、子どもたちもまた、試行錯誤
しながら自分の居場所を探している。そのなかで、うまく表現できずに怒ったり、泣いたり、
不安になったりすることもある。でも、その奥には「わかってほしい」、「つながり
たい」という願ひもある。その気持ちに気づき、言葉にならない気持ちだったり、まだ荒
削りな表現だったりをくみとって関わっていくことが、教員の創造的な営みの一つだと思
っている。

その意味で、教員の仕事は、音楽や服飾のような表現活動と、どこかで通じている。
「正解のない中で、誰かの心に届くものを探し、形にしていく」ということ。支援は、た
だ、「してあげる」ものではなく、一緒になって、「その子なりの表現」を探していくこ
とだと思ひ。

—つづく—